

# 働き方の未来 – 緩境界時代における朗働 –

## The future of work: Decent work in the age of de-boundarization

島津明人 (慶應義塾大学)

Akihito Shimazu (Keio University)

わが国では、雇用・労働環境の変化、価値観や働き方の多様化、デジタル化が進展し、社会や働き方における様々な境界が緩やかになりつつある。図は、これまでの時代（図左側）と現在進行中（図右側）の社会経済状況の特徴を、対比的に示したものである。たとえば、年齢の枠にとらわれずに働く生涯現役への移行は、現役と老後との境界を緩やかにし、場所や時間に左右されない在宅勤務の導入は、仕事と私生活、労働と休みとの境界を緩やかにしている。「緩境界化（かんきょうかい）」とも呼べるこの傾向は、コロナ禍で一段と加速しており、この傾向が続けば、社会はさらに変化し、中長期的には私たちの文明まで変化する可能性がある。

こうした緩境界化が進む中、日本社会は少子高齢化が進み労働力人口の減少に直面している。そのため、企業は働く人を労働力の提供者としての「人的資源」から、新しい価値を生み出す「人的資本」と捉え直し、労働力の「質」の向上を通じて生産性を高める戦略に転換している。一方、労働者も、コロナ禍で働き方の変化に直面する中、働く意義を再考し、より充実した働き方を実現するための方策を模索し始めている。つまり、現在は、社会全体が新しい労働観や働き方へと向かう転換期にあると言えるだろう。

本発表では、緩境界時代における働き方として「朗働」に注目する。話題提供者らは、緩境界時代の到来を念頭に、心理学、哲学、倫理学、経営学、経済学、政治学、産業医学、人類生態学、情報科学に関わる仲間とともに、労働を「朗働」という視点から捉え直して検討する新分野「朗働学」の創生を目的に、朗働学プロジェクトを立ち上げた。ヒトが仕事にやりがいを感じ、生き活きと働いている状態を「朗働」と名付け（島津, 2021）、働く意義の探究、生物・心理社会的基盤の解明、朗働の促進方策の開発を多様な学問領域を融合しながら推進している。話題提供では、朗働学プロジェクトの背景と概要について説明する予定である。

